

キャリア支援を考える 10 : 学校の熱意は地域が知っている

著者	川喜多 喬
出版者	教育新聞社
雑誌名	教育新聞
号	2584
ページ	7-7
発行年	2005-11
URL	http://hdl.handle.net/10114/8754

キャリア 支援 を考える

—10

千葉黎明高校を訪問した。千葉マリンスタジアムの3倍の面積がある広大な敷地といえ

ば、すぐにわかるように、もとは農業高校だ。明治時代に他の者

たちが諦めて去ったあとも畝を振るい続けた開墾者の志を継ぎ、西

村繁が大正12年に八街農林学園として開校。

開校時には創立者が地域の農家を尋ねて歩

き、農業に学が必要であることを説いて聞かせた

という。学問だけをやれというのではない。

実業のために学問をやれというわけだから、言葉はなかったがキャリア支援である。

最近、多くの高校・短大・大学が定員割れしては大変と教職員を

あちこちに旅立たせているが、果たして自分

の学校で教える学問が本当に将来役立つと信じている者、いかほどありや？（「こんなこととやらされるイヤな時代にになってねえ」と学校説明会の控え室で大声で叫んだ某大学教授を私は知っている。

だが、将来役立つとは、私は実は広い意味で捉えている。

たとえば同学園創始者の西村翁は、開校と同時にフランスバンド

チームを作った。スクールバンドとしては日本初だという。当

然、子弟に音楽を学ばせる余裕など、地方の農民にはなかったであろう時代である。この

伝統は今に続く。今でも地元の老人の中

には音楽器を吹ける者がいる。孫世代とともに行事になると参加

して、昔話をする者がいるという。地域に生

きて豊かな生き方をすゝめて、そして地域に育つ

次の世代と文化継承を共にできる、こういう

コミュニティの人づきりもまた、キャリア支援なのである。

老人たちとの交流は農学校から出発し、現在でも生産ビジネス学

科を有する同校では、カーテニングなど農家

以外のサラリーマンな

どの老後の楽しみのために様々な

教室を開放している。また、生徒

が作った野菜果実は地域の人々の

口に入る。作ったものは食べるか

売れ！（当然だ）

然だろ？売れるかどうかかわらない知識を頭に詰め込む

普通教育よりは、はるかにまじだ、こう

言って生徒に作らせるものは無農薬。ゆえに地域の人は学校のイベ

ントに喜んでやってきて買っている。

学校の熱意は地域が知っている

学校に成る銀杏からタケノコまで売って資金稼ぎをしているのが

「工学部」。大学の工学部ではない。工学の

クラブであるが、手作りの電気自動車レース

に毎年のように出場。毎年全国の競技でトッ

プクラスの成績をあげている。町のお祭りな

どもにも出てスポンサーを探し、レーシング

カーにはスポンサーの名前をつける。職業訓

練である。ともかく力

を稼ごう、生活を成

り立たせようという職

業ではない。自分たちの夢のための資金集め

の訓練だ。かつそれは技能の成長と知識の獲得を伴うのである。

法政大学キャリアア
デザイン学部教授

川喜多 喬

デザインは大学や専門学校、ほとんどない。